

平成 27 年度中学校武道授業(なぎなた)指導法研究事業



実技を交え、指導法の検討

平成 27 年度中学校武道授業(なぎなた)指導法研究事業〔主催＝(公財)日本武道館・(公財)全日本なぎなた連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省〕は平成 28 年 1 月 23 日～24 日の 2 日間、日本武道館(東京都千代田区)において実施された。

本研究事業は、今年度 5 回目を教え、学校関係の研究者 7 名(うち中等教育を含む中学校教諭 5 名)が集まり、各自の実践例報告を行った。

備が整ってきているからと言えます。来年度は内容の間われる 5 年目に入ります。本研究事業を通して、なぎなたのすばらしさが中学校の生徒を中心に学校関係者に伝わり、実施校が増えることを期待します」と述べた。



三藤理事・事務局長

■1 日目(1 月 23 日)

開講式の主催者挨拶では島瀬美佐子(公財)全日本なぎなた連盟専務理事が「今回 5 回目をむかえました。研究者の皆様には日頃の疑問や課題解決のため、十分な討議を行っていただきたいと思えます。実りある研究事業にしたいと思えます」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が挨拶に立ち「必修化も 4 年目が経過しようとしています。必修化が実施されてから武道種目の採用校割合について大きな変化はありませんが、外部指導者の導入と複数種目の実施が減少傾向にあります。これは中学校の保健体育科教員が一種目を徹底して指導できる体制並びに準



島瀬専務理事



安井研究者

引き続き、研究者代表挨拶が行われ、安井みどり(公財)全日本なぎなた連盟国際委員長が「私は今回 3 回目になります。昨年までの実践例のまとめを月刊『武道』に掲載していただきました。必修化におけるなぎなた授業の更なる充実のため、この研究協議で話し合い、課題克服に努めたいと思えます」と意気込みを述べた。

開講式終了後、早速検討協議に入り、研究者の実践例報告と現状の課題について報告された。渡邊美穂研究者(城東中学校教諭・大分県)からは「大学を卒業して間もなく選択授業でなぎなたを指導する機会があり、その時には生徒数が少なかったこともあり防具の着装まで実施で

きた。簡単な動きの組み合わせではあったがリズムなぎなたも経験させることが出来た。授業以外では棒術が盛んな地域で全校生徒約100名に対し、半日かけて指導を行った。最後は発表会まで開催し、子供たちに楽しくなぎなたを経験してもらうことが出来た。現在、なぎなたの指導者が少ないこともあり、なぎなたの授業自体が実施できない状況にある。授業では柔道を実施しているので不安はあるが、私を通して武道に触れてもらうよう心がけている。指導者を増やすため、なぎなた初心者の先生が参加しやすい研修会の実施を希望している」と報告があった。渡邊研究者からの実践例報告を受け、畠瀬専務理事は「全日本なぎなた連盟としては11月に日本武道館と共催している全国研修会があるので、研修会を活用していただきたい。なぎなた未経験の先生の参加を歓迎する。研究者の方には各都道府県で引き続き、参加の呼びかけをお願いしたい」と述べた。

徳地昌代研究者（都立南多摩中等教育学校教諭・東京都）から「以前は高校で授業を行っていたがカリキュラムの変更が難しかった。現在は中等教育学校に赴任したので、ある程度は教員に裁量が与えられているので意見が通りやすい。高校で創部するには、存続できるか、生徒が自主的に活動できるかなど制約が多かったが、今はクラブ活動が発足しやすい環境にある。武道経験者がいない学校ではなぎなた授業を未経験者が指導することになるので、なかなか難しいと思う。なぎなたを通して何を伝えるか、何を学ばせるか、授業として生徒にどこまでを求めるか悩んでいる」と現状報告があった。



■2日目（1月24日）

この日は小道場に場所を移し、実技における指導法の研究を行った。

その後、各研究者が2日間の感想を述べ、研究協議を終了した。小倉尚美研究者（晃華学園中学校高等学校教諭・東京都）が「昨年に引き続き参加させてもらった。昨年のこの研究事業で授業の躓きを解消でき、1年間なぎなたを実施することができた。今年は今年で新たな躓きがあり悩んでいたが、この研究協議を通して、解決策が見え、良い機会になった。学校に戻り、生徒に還元したいと思う。今後は指導者の人材確保が大きな課題だと思うので体育教員として研修会等に参加することはもちろん、次の世代に提示できるよりよい資料を残していきたいと思う。非常に充実した2日間だった」と述べた。

閉講式では今浦千信研究者（汎愛高等学校教諭・大阪府）が「なぎなた未経験の指導者であってもなぎなた授業における指導では基本的なところは押さえ指導していただきたい。そのためには経験者の先生が正しい指導内容を理解し、

わかりやすい表現でしっかりと提示できるようにしていかなくはならないと考える。今後は実施校や指導者数など実態調査を進めていきたい。楽しく出来るなぎなた授業は何かということをもう一度原点に戻り、検討していきたい。この研究事業で学んだことを学校に戻り、それぞれが新しい仲間を増やせるよう努力していきたい」と講評を述べ、2日間の全日程を終了した。